

【学部創立 10 周年記念企画】

座談会：研究の過去と未来

登壇者：LOEHR Marc（レール マルク）

杉井 学

上田 真寿美

有元 光彦（司会）

本座談会は、研究推進委員会が主催する学部創立 10 周年記念企画として、2025 年 11 月 21 日（金）13:00～14:20 に、国際総合科学部学部長室にて開催されました。文字化においては、当日の雰囲気を失わないよう、お話しされたことをなるべくそのまま掲載しています。登壇者の熱気のこもったお話をお楽しみください。

有元（敬称略・以下同様）：学部創立 10 周年記念事業の 1 つとして、研究推進委員会が主催する座談会を始めたいと思います。よろしくお願いします。本日のテーマですけれども、簡単に言うと、研究面に関する、過去と未来というものを語っていただければと思います。先生方ご存じのように、本学でも外部資金を獲得するということが強く求められています。そのためには個人の研究を高める必要はもちろんあるんですけども、時にはチームで何らかの共同研究を進めていくというようなこともあるかと思っています。そうするとそういうような、研究力を高めていくためにはどうすればいいかということが課題になるんですけども、それに関するお考えをお聞かせいただければと思います。本日は、学部長経験がおありの先生方、レール先生、それから杉井先生、お越しいただいてますし、それから現在学部長されてます、上田先生にもお越しいただいてます。以上 3 名の先生方にお越しいた

だきまして、いろいろとごつくばらんにお話いただければと思います。司会は、研究推進委員会委員長をやっている有元が務めます。よろしくお願いいたします。それではまずは、先生方がどういう研究をされているのかということに関しまして、少しお聞きしたいと思います。メールにもありましたけれども、現在までにどのような研究をされてきたのかとか、今後、どのような研究を進めていきたいのかとか、その 2 つは、どうでもいいと言えばどうでもいいんですが、一応、研究面ですので、それぞれの先生方がされてる研究の魅力みたいなものをアピールしていただければと思います。それじゃあ順番は、レール先生よろしいでしょうか。お願いします。

レール：皆さんご存じだと思うんですけど、マスメディア、マスコミュニケーションは専門なんですけれども、なんでそれにたど



レーン教授

り着いたかって言うと、16歳から私新聞社でバイトしてたんですよ。記事書いたり、17歳で、ジャーナリストになりたかったんですよ。17歳からもう評論とか新聞紙面作りとか地方紙で任されたんです。ドイツの高校は昼までで、午後は何もしなくていい、宿題以外私はもうそういうバイトを始めて、週末はずっといろんな取材をして楽しくてしょうがないんで、外国特派員になりたかったんですよ。それじゃあ、何がいいのか、政治学、経済学とかそういうのを勉強したらいいかなど。外国語で、変な外国語がいいかなと思って、ちょうど1982年に日米貿易摩擦があって、そこでデトロイトで日本の車が壊されて半日デモがあったんですよ。石ノ森章太郎の日本経済入門という漫画にも書いてあるんですよ。日本でもそれが伝えられてて、それですごいバイアスがあるんじゃないかと思って、何が悪いのかって、メディアが悪いんじゃないか、日本人ってそんなに悪徳かなと思ってた。日本人、日本って何だろうと思って、全然わかんなかったんです。翌日、小さな町の本屋で日本に関する本を全て買ったんですよ。バイトしたから、ポケットマネーがあった。全

部買いました・・・2冊しかなかった。だからすごく遠い存在だったけども、すごく面白いと思って、大学に入って、専攻として日本学を取ったわけです。副専攻は政治学で、あとはメディア論もとったんですけど。博士号も一応日本学、ジャパノロジーで取っているんですが、専門はメディア論っていうことで、ずっとそこからメディアやマスメディアに興味があって、特に日本のメディアにも興味があったわけですから、新聞のルーツがありますので、ずっと日本の新聞を研究してきて、半年も静岡新聞社で参与観察してて、参与観察が好きなんです。それも1つのポイントなんです。本だけじゃダメなんだと。自分も体験して下から見るのが好きなんです。その研究スタンスをまだ持っています。新聞をずっと研究していて、博士論文は結構遅かった。44歳で取った。でもそのときはもう新聞が衰退しつつあって、まさに今はその新しいメディアにやられているわけです。今、私は方向を変えて、走り始めてから、スポーツとメディア、特に日本のランニングに興味持っていて、そこもまた自分が走り始めてから自分を見て、自分がどういうメディア行動をしているかということで、また参与観察で、ランナーとしてどんな情報が欲しいかっていうのをやっていて、そこから今度はランニングブームを見て、箱根駅伝にたどり着いた。この第2巻で箱根駅伝のそのメディア露出という論文が載せられて、そういうスポーツのメディア化に一番興味があります。少し長くなりましたが、これは私のルーツでもあるわけですので、ちょっと大事だなと思いました。以上です。

有元： ありがとうございます。それでは杉井先生お願いします。

杉井： レール先生と実は同じというか、自分の研究のことを遡ると小学生ぐらいまで。実は遡って、小学生のときに私ファミコン世代なんですね。初代のファミコンが出たっていう世代で、だけど親はファミコンを買い与えなかった。買い与えられたのはゲームもできるんだけどベーシックっていうプログラムもプログラミングもできるコンピューターみたいな機械だったんです。MSX っていうんですけどね。それを買い与えられて、最初はゲームやってたんですけど、だんだんプログラムって何だろうって思い始めて、小学校の5年生ぐらいだったんですけど、そこからプログラムの本を見て、最初は意味わかんないから単に打ち込むっていうことから始めて、だんだんとそういうところに興味を持ってきて、父さん、高専に行くよ、私鳥取県の米子出身なので、米子高専すぐ近くにあって、高専に行きたいって言ったら、親には反対されて。やんわりと、いや工業大学ってのもあるんだぞ、まずは普通の高校に行かないかって言われて。それで、普通科の高校に行って、じゃあ工業大学に行ったかって言ったら、そこで実はちょっと変わって、自然っていうのも好きだったので、それで、生物学を学びたいって思って、理学部の生物学科に入ったんですね。学位を取るまではもう本当に試験管を振っていて、細胞分裂の仕組みっていうのに非常に興味を持っていたので、試験管を振って、学位を取って。それまでコンピューターのことは嫌いだったわけでは



杉井教授

なくて、レール先生にもいろいろお世話になりながら、コンピューター系のサークルを作ったりして学生のときにやってましたけど。ですけど、研究としては生物学、分子生物学だったんですよ。学位を取ってポスドクを始めたんですけど、医学部に行ったわけですけど、そこで、元々学位を取るまではタンパク質を追ってたんですけど。学位を取ってポスドクになって遺伝子を追いはじめたんですね。そしたらもう遺伝子って情報量多すぎて、人の目で見て何かできるっていう世界ではなくなって、やっぱコンピューター、計算機使わないともう手に負えないっていう状態になって。コンピューターは好きだったし、じゃあそれを使った研究にちょっとシフトしていこうというので、コンピューター使い始めて。そうこうしてる間にだんだんコンピューター寄りになっていて、メディア基盤センターってところに就職したんですけど、コンピューターを使った遺伝子解析みたいなことやり始めて、だんだん情報学系のことを取り入れ始めた。情報学のことをやり始めると、今度はその情報学のテクニック使って、いろんなことができないかなって思い始めて。最初

は生物系の情報生物学って言われる生物系の解析をやってたんですけど、最近になったらだんだんハワイ移民の話とか、いきなり飛ぶんですけど、ハワイに行った人たちのデータがすごく詳細に残っていると。そのビッグデータ使ってる中に今まで分かってないことが分かってくるんじゃないかみたいなことを情報学的手法を使ってやり始めた。さらにはですね、もうちょっと今度はハードウェアの方にも興味を持ち始めて、最近では、マイクロコンピューターを使ったりしながら環境情報を、ハードウェア作って把握して、それをネットワークで転送して、1箇所に集めて、その情報を使って分析をするみたいな。自分の興味いろんなところに、興味があるんで、いろいろ渡り歩いてるんですけど、でもやっぱり今考えてみると自然が好きで生物が好きっていうことと、コンピューターが好きで計算機を使いたいっていうこの2つが中心になっていて。今思うと、三つ子の魂100までだなんて思っていて、高専には行かなかったけど、最終的に今やってることってぐるっと回ってきて、やっぱり子供のときに興味も持ってたコンピューターのこととか、プログラムのこととか、なんかそういうのを使って研究してるなって最近思っています。はい、以上です。

レール： もう30何年前に初めて会って、すごくしびれました。電気システムやコンテナってことで、初めて、なんていうのか、学際的なことを学校でやってたような気がするんですよね。

上田： 先生と学生さんの関係だったんですね。

レール： 久長先生もね。

杉井： コンピューターのことを始めるとやっぱりその頃情報処理センターっていうところとの繋がりができてきて、そこで活動し始めて、まだ当時インターネットなかったんで、インターネットの普及みたいな時代だったので、普及をしようみたいなことをやったときに、レール先生とも繋がって、サークル作ってレール先生に名前つけてもらって。いろいろやりましたね。

上田： 先生ご存じでしたか。

有元： いや、知らなかったです。

杉井： あの頃楽しかったですね。

レール： 本当に久長先生めちゃくちゃはしゃいでたんですよ。大学会館でもシンポジウムやりました。

上田： 久長先生も昔からいらしたんですか。

レール： そうです。久長先生はそこで初めて理系と人社系の人たちが一緒に立って議論するっていうのは素晴らしいって彼が喜んでたんで、なんかすごい新しさを感じました。

杉井： なんかその当時だからレール先生と久長先生と松野先生と杉井とその仲間たちみたいなんで。

上田： 今もその仲間たちは続いていますね。

有元： ありがとうございます。それじゃあ上田先生をお願いします。

上田： はい。私の方は、研究を目指したのが遅かったこともあったので、先生方のような、それに触れた最初っていう話はとても現実的で、これから学位を取って、研究生生活を進めていくには、他の人がしていない研究分野の方がいいだろうということで、女性、更年期、スポーツあたりがあまり研究されていないので、その分野をしたらどうかというところから私の研究生生活がスタートしました。それで今は、私は、女性のライフステージにおける健康と行動、特に行動の中でも、運動がどのようにライフステージの健康に関連して、貢献できるかについて研究しているところです。日本の女性っていうのは、世界に名だたる、本当に世界第一の長寿で 87 歳なんですね、平均寿命。これ、試験にも出すと学生には言ってるんですけど。女性が 87 歳、男性が 81 歳で、6 歳ほどの違いがあるのが、今の日本の現状で、男性も女性ももう世界に名だたる長寿だということなんですね。けれども、長寿ではあるんだけど、女性は各ライフステージで、様々な健康上の悩みを持っていると言われてます。例えば 10 代とか 20 代は、月経不順であったり、月経痛であったり、月経前症候群とかいうのがあって、もう受験のときに、月経になったらどうしようとかっていうような心配を抱えている女子学生



上田教授

はたくさんいらっしゃるんですね。また 20 代や 30 代になったら、妊娠出産に関すること。また 40 代、50 代になると、先ほど話しました更年期、更年期障害などがあります。プラス、長寿だから意外というふうに思われるかもしれないし、女性の方が長生きだから意外と思われるかもしれないんですけども、日本人の死亡原因の第 1 位はがんなんですけれども、がんの罹患率っていうのは、全体では男性が女性よりも高いんですけども、20 代から 50 代前半まで、女性の方ががんにかかる罹患率が高いというのが実情なんですね。なので、がんを始めとした様々な病気を抱えながら、社会で頑張っている女性は、結構いらっしゃるということなんですね。なのでこれまで私は疾病の予防に対する運動の効果の研究の中心にしてきたんですが、今は罹患後、いわゆる病気にかかった後に、運動が貢献できないかというようなことを研究している。つまりは病気にかかった方が社会復帰するその過程の中どのような運動がその方にフィットするのかを今研究しているところです。病気になってしまうと心身共にもやっぱり落ち込むんですね。なので、それを、運動とか、

運動心理学の側面から、応援できたらいいなと思いながら今研究を進めています。以上です。

有元: ありがとうございます。いろいろな、先生方、それぞれの魅力がたっぷり紹介されたんじゃないかと思います。私は、言語学をやる動機はものすごく不純で。大学へ入るときに文系だったんですけども、文学部に入りたいというのは決まっていたんですけど、じゃあ何をやるかっていうのはなかなか選択が難しかったんですね。行こうと思っていた大学にはいろんな語学の英語学とかフランス語学とかドイツ語学とかっていうように学科が別れていたんですけども、なんか英語学へ入るとたぶん4年間ずっと英語しないとイケないですよ。フランス語学へ行くとフランス語ずっとしないとイケないので、それはたぶん苦痛だろうと思ってたんですね。ですから、いろんな言語



有元教授

ができるところがいいなと思うと言語学っていうところがあって、そこで入ったっていう非常に不純な、何をやりたいっていうわけではなくて、たくさんの方がやりたいかなと思って、そこへ入ったということ

なんですね。入るといろんな言語ができるわけではどうもない学科のようで。言語のなんか本質みたいな仕組みみたいなことを一生懸命やるようなところだというのが入ってから分かったんですが、それはそれで非常に興味が湧いた分野でした。それで、順調にうまくは行ってたんですけども、じゃあ、卒業論文とか、それから、修士課程とか行ったときに何をやるかっていうことがやっぱり問題で。他の人がやらないことがないかなと思ってたんですけども、なかなかこれまたきちんとした動機があるわけではなくて。ちょうどその頃、ある学生がいたんですけども、その学生の出身地が長崎県の五島列島というところだったんですね。そこが面白いっていうことが分かって、じゃあ行って調べてみようかということになりました。でもその方言って言ってもいろんな面があるので、じゃあその中の何をやるかってなるとさらに難しい話があって、大体方言の研究は人がやってるんですね。何か新しい発見をしようと思っても大体誰かがやってるので、あんまり新しいところが見つからないということだったんですけども、たまたまずっと調べていくと、活用ですね、動詞の活用の面が面白いんだということが分かってきて、じゃあそこに焦点を当てて調べていこうということから始まりました。どんどんどんどんフィールドワークの先を広げていって、今はもう大体九州ほとんどいろんなところへ行って、たぶん100地点以上ぐらいを調べているような状況で。そうすると、方言の違いが出てきたりして、そこがだんだんだんだん興味が深まっていったところですね。それで今もずっと研究

つづけています。それだけだったらまあいいんですけども、これを大学で例えば学生に向かって授業するっていうのはなかなか難しくて。方言と言うとなんかこういう言葉がありますよ、こういう言葉がありますよというのは、学生は興味持ってくれるんですが、仕組みたいなものに関してはあんまり興味を持ってくれないんですね。ですので、大学ではあんまりこの話はしてないという状況ですね。研究面、もっぱら研究にそれ特化したような形でやっているということになるかと思えます。それをずっと続けてきたんですが、ここ10年ぐらい前から、今度留学生がどんどんどんどんやってきて、東アジア研究科とかで学位を取る学生が多くなったんですけども、今度は学生に何をそれやらせるかっていうことが次に問題となってきました。日本語の先生でやってくる学生が多かったので、日本語教育で役に立つようなトピックを扱うのが1番いいのかもしれませんが、私は日本語教育ではないので、どうしてもそのシステムティックなところを、やらせようということになって、今は感動詞というのを、もっぱらやっております。感動詞ですね。「えー」とか「あー」とかっていうあの感動詞なんですけれども、あれ日本語教育であんまり扱わないんですね。日本語の文法でも無視されてたんです。名詞とか動詞とかは一生懸命、文法の時間ではやるんですけども、感動詞っていうのは全然やりません。これ単に生理的な発話だろうというふうに考えられていたので、それは文法の面でも日本語教育の面でも無視されていたようなところをずっと最近やってるんですが、そこでいろんなまたまた発見があっ

て、非常に面白くなったような次第ですね。それを学生にもやらせて自分の母語との比較とか。というように持ち込むとさらに面白いことが出てくるので、最近は、その感動詞の研究もずっと並行してやってるような状況ですね。

上田： ちょっと恥ずかしくてあれなんですけど、感動詞の感って感情の感？

有元： 感情の感。感動するとき。

上田： 感動するとき「わー」とか「あー」、なるほど。

有元： それだけではないんですが、「ええ」とか、あとこう喋ってるうちにいますよね。私なんかものすごく多い方なんですけど、その「えー」とか「あー」という単に繋いだ言葉というふうに思われていたんですが、やはりやっていくと特別な機能を持っていたりするので、その辺が深くやれそうだなとって今も続けてるような状況ですね。

上田： どんどんできそうですね。

レール： 今松尾芭蕉を思い出したんですよ。松島や ああ松島や 松島や。

有元： そうですね。はい。

上田： 言語もできるかもしれないし、特に留学生の指導とかだったらですね、学位の指導だったらですね。

有元： はい。ですので、先生方と違って入

り口はものすごく不純だったんですけども、少しずつうまくいってきたんだというのがあるかと思いますね。

杉井： 難波先生のオノマトペとなんか通じるものがあるような。

有元： そうですね。難波先生のご専門となんかちょっと重なってはいますね。ただ、どうでしょうね。アプローチの仕方がやっぱり違うような気はしてますけれども。はい。ちょっと長く喋りすぎてしまいました。すみません。私司会です。

上田： でも今日はすごい。なんか初めての話が多くてすごく感動してます。先生の出会い。ちらっと先生にもお伺いしてたときもあったんですけど。

杉井： 今更ながらですけど、私人文学部の乾先生と言語の分布地図作るってやってたことがあって。乾先生エチオピアの言語、エチオピアって80ぐらいあるんですよ。それがどう分布してるかみたいなので、そこでそれ一緒にやってたときにすごい面白いなと思ったのが、エスノローグっていう世界の言語の分布をまとめたなんか分厚い本があるんですよ。すごい細かく書いてあるんですよ。言語、この地域だけにしかない言語とか、もう死語になっている言語がここにあったとか。誰がこんな調べたんだろうって思ったんですよ。そしてその答えを聞いたときにはっと納得したんですけど。キリスト教の宣教師。ちょっと感動しましたね。あれすごいですね。

有元： 今ネット上に全部アップされていて見られるようになってます。

上田： 布教していく過程の中でなんですよ。ね。

杉井： なるべくしてなったというか、できるべくしてできたというか。あれ面白かったですね。

有元： 先生方、ありがとうございます。それでは、いろいろ話は尽きないんですが、次の話題移っていきたいと思います。先ほども申し上げましたように、今度は学部全体の研究面に関して、少しお考え聞かせただけだと思います。これも先日メールで差し上げましたけれども、過去の学部の研究体制というのはどうだったかというのをお聞きしたいですし、それからそのときに出てきた課題とか、それが解決されたかどうか分からないんですけども、いろんな課題が出たというような話とか。それから、未来のことで結構なんですけど、これから研究力を、個人もそうなんですけど、学部全体としても高めていくために、どのようなことをやればいいのかというような、アイデアと言ったら大きいかもしれませんが、ちょっとしたお考えでも結構ですので、お聞かせください。それじゃあこれは、自由に、行こうかとは思ってるんですけど、過去のことに関しては少しお伺いしないといけないかと思います。

レール： やっぱりそこは時系列があると思うんです。この課題を聞いてたときに、自分が学部長のときに何をどういうふうにな

したか、どういうふうに変わってきたかということを考えていて、かなり暗くなったんですよ。まずは4年間糸長先生が、ずっとデザインした通りに、学部を運んでいたわけなんですよ。そのときはとにかく教育っていうことが中心だったんです。最初の4年はそうですね。「アウトプットオリエンテッド」と言ってね、そういう学部でした。教育の中でもそういうことがあれば、研究にも反映されてしまう可能性があります。PBLの議論もそうですし、今はだいぶ変わってきたんですよ。自分の研究に近いPBLが可能になったけれども、当時は全く違って、「なんで私はこんなものを担当しなきゃいけないか」という、教員から文句もありました。まずは数をこなさなきゃいけないということがあって、割り振られたわけです。全然悪くはないと思います。私が学部長になったときに1つの大きな問題は、教員の研究活動がバラバラすぎるということです。本当にその4年5年目に入っても、そうだったんです。私が思ったのは、まだそのときは考える余裕があったので、当時に作られたグループに原因の一つありました。要するに糸長先生が提案したグループは、実は職位を気にしてて、例えば若い助教と准教授と教授が入っているグループでした。けど、全く機能しませんでした。そこで私は、グループで何か同じテーマで話題ができるような、あとはいろいろとシナジー効果が生まれる可能性がある4つの、そういう職位を気にしなくて、テーマを中心に人社系、学際系、コミュニケーション系と理系を作りました。最初はよく話し合いはしていたんですよ。特に理系の方が結構頑張っていたって、定期的に会ったと思うんですけ

ど、人社系の方が結構みんなは一匹狼すぎる、という感じがしてたんです。一つ、グループができてすごく助かったのは、業績評価表を作ったとき、それぞれのグループに投げて議論してもらったんですよ。特に研究評価、教育評価の評価点とか項目とかは問題なかったけれども、やっぱり人社系と理系の方は、その間にある学際系もそうですが、論文の数が違う、ボリュームも違います。人社系は何年かに1本か2本書くか。理系の方はやはり回転が速いこともあって、どう評価しましょうかっていうことで、最初はもうこれが一つの評価表でできるのかと思いました。一枚でまとめましょうということ、最終的には皆さんが納得してできたものなんですよ。私のときにはまだ実際に試験的に使ってたんで、今はこれが皆さんにはちゃんと給料にも反映されていて、見直しも必要かなとも言われているけれども、グループに投げて議論して、グループごとに出たもので、最後にまとめたのは非常に助かって、私はどっちかというところいうバラバラな集団の中で効率的なやり方だったんじゃないかなと思っています。なんで暗くなってるかって言うと、今はこういうグループはあんまり機能してないんじゃないかなと感じるからです。

上田：先生のところは本を書いたりとかされてますよね。

有元：そうですね。パンフレットみたいなのを作ったりもしています。

レール：そうなんです…ところによつてはね。人社系はとにかくきつい。

上田： 動かない？

レール： 動かないですね。はい。だから共同研究とかもそれで生まれる、話し合いができて生まれるかもしれないなど期待したけれども。そういうところもあれば、嬉しくなるんですけど、それが無い部分もあります。もう一つは、インセンティブが必要じゃないかと思って、インセンティブを私が初めて導入したかな。科研費でAに近い科研費をもらってない教員にちょっと支援したわけなんですね。実はそれで翌年科研費が当たっていったる理系の先生が「おかげさまで当たりましたと。おかげさまで研究が続けられた」というフィードバックがありました。要するにお金が必要だったんで。その次の申請に向けてできたっていうのは良かったですね。もう1つやってたのは、



学部内でのプロジェクト。一時期にありましたね。今は、申請はないですね。それぞれの個人は、科研費ではなくて、何かのプロジェクトがあればそれも応援しましょうということで。コロナが入ってきて。研究も海外とはいえ海外行こうとする人もいたけれども、県外も行けないということで、どうし

ようかっていうことで大変なことになって。2年目のときにはもう研究を考える暇がなく、留学はどうか、留学できないということで。それは別の話なんですけれども、保護者対策システム、応援のプログラム作りで、結構皆さんに応援していただいて、留学ができないときに、グローバル化を担保できるかということでいっぱいだったんで、はっきり言って、研究のことも考える暇がありませんでした。

有元： ありがとうございます。

上田： そうですね。やっぱり人社系っていうのはそれぞれが本当に1人でぐっと深めていくような分野なので、一緒に何かを、っていうのは、分野的に難しいところもあるのかもしれない。

レール： でもその中でもいい試みがあったんですね。人の移動に関して杉井先生もプロジェクトを作ってたじゃないですか。

上田： 人と移動の話ですかね。

レール： 人の移動って、藤原まみ先生もプロジェクトをやっていましたが、そういった学際的な試みが見られたわけなんですね。

杉井： いや、なんかこの学部の特徴ってやっぱり学際性なんだろうなって思ったんですね。学際的な研究ってじゃあどうやったらできるんだろうと。自分自身は、理系の研究が主だったんですけど、基礎研究から入って、医学部に行ってだんだん応用系のところに行ったんですね。今さっきのよ

うに人文学の先生と一緒にやったりとかで。なんとなく、学際系のことできないことはないんだらうなって思っはいたんですけど、いろいろ大学院作るかっていう話でやり取りしていったときに、もう大きく違うってことが分かったんですよね。先ほど言われたように。

上田： 思い知った感じですか？

杉井： そうですね。というのは、悪い意味でもないんですけど、その研究のやってる内容、分野がもちろん違うっていうこともあるけど、その研究スタイルが違うんですよね。片や共同でやっっていくのがベースの研究分野と個人研究でやっっていくっていう分野の大きな違い。これが1番でかいんですけど、他にも、その成果物とその評価の違いもありますよね。理系だと論文書くのが大事。だけど人社系だと本書くのが大事ってというような感じで。その評価の仕方もやっぱり違うっていうのもあつて。さらにもっと踏み込むと研究の意義みたいなのも理系と文系で全然違うなって感じ始めて。何のためにやってるのかみたいところとか、それを調べる意義はどこにあるのかっていうところもやっぱり全然違うなっていうのを話をしてて感じ始めたんですよね。こりゃ、一筋縄ではいかないなって思っていて。それ大きな課題だなって思ってるんですけど。1つ実は今私やってることがあつて、その学際領域の研究進めるにはどうしたらいいかっていうので、ファンダメンタルズプログラムっていうので、私今一員になってるんですけど、科学技術広報研究会っていうのがあるんですね。日本全国の科学広

報に関する人たちが集まって、任意団体みたいな作って活動してるんですけど。このプログラムはアーティストと研究者を混ぜ合わせると何が起るかっていうやつなんです。今私はある1人の現代美術家の人とコラボしながらやってるのと、もう1つは様々なアーティスト、日本画家の人もいるし、彫刻の人もいるし、それからインスタレーション、現代美術の人もいるし、音楽の人もいるし、っていうグループの中に私が入って一緒にやってるんです。科学者とアーティストが活動を一緒にして何かアウトプットを出すと面白いものが出るかもしれないっていうプログラムなんですよ。そこで、すごく私自身も共感したんですけど、これの代表の人が言っただのと全く同じなんですけど、アーティストと科学者ってすごい似てるんですよ。というのは、話をしてて、普通に話ができるんですよ、実は科学者とアーティストが。そこにすごい感動して、例えば、その問いを立てるとか、リサーチクエスションが云々っていう話をすると、アーティストたちはみんなちゃんと理解してるんですよ。やり方を聞いても、同じステップを踏んで、研究と同じステップを踏んで作品を作っていってるみたいなんですよ。すごい発見で。ちゃんとリサーチクエスションを、アーティストもリサーチクエスション立てて、そのために調査をして分析をして、アウトプット出すっていうステップを踏んでる。科学者との違いは、科学者は今までの膨大な科学の歴史の中から見つけられた事実でフィルターをかけてアウトプット出すんですけど、アーティストは自分の中にある思想心情のフィルターでアウトプット出すんですよ。そのフィルターの違い

だけで、やり方同じなんですよね。っていうことに気がついたんですよ。これすごい面白いなって今思って活動していて、一緒にやってるんですけど。中にはすごいぶっ飛んだ人もいて、やっぱり芸術家なので、私はゾンビをテーマにしていますっていう人がいて、ゾンビって面白いんですよ。ゾンビの定義って何か分かりますかとか、ゾンビにもいろんなタイプがいるんですけど、ゾンビって必ず1回死ぬんですよ。死んだ後に生き返るっていうのがゾンビなんです。って言われて、そのゾンビ、それが共通の定義なんですけど、そのゾンビって一体どこから来てどこへ行くのかもわかんないし、人か人じゃないのかもわかんないみたいなので、そこのなんかいろいろバリエーションがあって、ゾンビの人すごい面白いんですけど、ぶっ飛んだ人もいて、あと音楽は自分は音楽になりたいとかっていう人がいて。もう本当にぶっ飛んでるんですけどでも根底には科学者と繋がる場所があって。この活動をしていて、その学際的な研究を始めるのに必要ななんかヒントみたいなのがちょっと見え隠れしてる気がするんですよ。全く違う異分野の人と新しいなんか成果を出すっていうときに、どういうことに気をつけないといけないのかなとか、どうやったらうまくできるのかなみたいなのを、探りながらやってるんで。これうまくできるともうちょっと学際的な研究って進められるかもしれないなっていう。ちょっと感触を持ってる場所ですね。依然として学際的な研究ってやっぱり難しいなとは思ってますけどね

レール： 坂本龍一って、学者、科学者、ア

ーティスト？

上田： 本当ですね。そうですね。

レール： 彼を見ると。

上田： そう思いますね。

レール： あの時代のアナログシンセ世代の人たちはもうまず音作りから工学的な知識がないとアーティストにはなれなれなかったと、今思ってます。大好きなんですよ、坂本さん。

杉井： 紙一重というか、どっちにも転べるっていう感じなんですよ。

上田： 音楽家って工学系の人結構いますよね。

レール： そのシンセのアナログの時代はまずは音作りの研究から始まったんで。

上田： 私は実は大学院は学際系の大学院を、私の母校が作ったっていうので行ったっていうような感じなんですよ。さっきお話したような研究には何が必要かっていうことで、例えば、医学部であったり、理学部、理学部ってのは、物理、いわゆる関節の動きとか、そういうのを自分があまりよく知らないんで、それを教えてもらうために入ったわけなんですけれども。どこの先生に聞きに行ってもいいっていうのは非常に学生としてありがたかったんですよ。今もそのマインドで中で繋がるっていうよりは私は外でというか、外っていうのはその大学外と

いうのではないけど、大学内だったら違う学部なんですね。今も理学部の、物理関係の方には、やっぱり関節の可動域とかいろんなこととか扱う研究会に参加させてもらって、研究推進体にも入ってるんですけど、知らないことだらけなんですね。自分は元々教育なので、教育心理とか、スポーツであるとかそういうところは自分にはちょっと分かってるんですけども。学生のとときに医学的なテーマを与えられたっていうこともあって、医学部とも今繋がりがあって感じて。こういうことやり出したらですね、やっぱり医療費とか、費用の関係になると費用のこと全く知らないから経済の先生と繋がっていったりっていうような感じの繋がりがあってというのが、自分の中の繋がりがなくなって思う。その学際的な。先生の今のお話とはちょっと違うかもしれないんですけど、自分としては学生のとときのそのスタイルで学際的に始めたこともあるので、今もそのスタイルかなっていう感じです。研究の仕方としては。

レール：面白いですね。学際性は本当にうちの学部の一つの特徴、売りですね。それをこれからどうやって強調できるか。

杉井：なんかそのつい主従関係みたいになっちゃってしまいがちなところもあってコラボしてるとですね。例えば情報学の研究者って、ともすると使われちゃうっていうか、情報学的なテクニックでもって解析ができるので解析はできるんですけど。例えば、よくあるのは医学部の先生方と情報学でコラボしてとかなんですけど。医学的データを解析をする役割分担のみ。医学的な成果は出る

んだけど、情報学的な学問で新しいことは何も得られないことになっちゃうと、もう長続きしないですよ。これ対等にこう並列関係でお互いに新しいことが得られるようにするにはどうしたらいいかっていうのはすごい難しいんですよ。

上田：私のようなやり方をしたらそれができないんですよ。自分に必要な、自分ができないことで必要な人に広げるよっていうのは、さっき先生がおっしゃったように自分は統計弱いからその統計部分をしてくれる人を探すっていうのが私のスタイルで今までやってきたんですけど、それだったら今先生がおっしゃった通りですね。どちらにとってもというようなところが、弱くなるかなっていう感じの懸念もあるんですよ。

レール：でもこれで方法論としてはうちの学部のデザイン思考に近づくような感じがするんですよ。今、先生がおっしゃったように。クリス先生が言った、デザイナーは具体的に何もできないんですけども、できる人知ってるんです。必要なときにそういう人たち引っ張れる。だから大枠は理解してデザインできるんですよ。そういうような感じがするんですよ。まずは何が必要ですが、今の時点では「私には分からない」という自己点検から始まって、まず骨組みを作って、「じゃあその知識を得るにはどういう人たちとかどういうコネクションが必要なのか、どういう知識が必要か」というのを取り込むっていうのは、我々は今 PBLの方でおそらく教えているなと思います。

有元： そうですね。はい。たぶん個別の先生方は外部といろいろな繋がりをするんですけども。 どうでしょうね。学部の中で何かうまくできる方法っていうのは何かお考えありますか。

レール： ラディカルに。

有元： 前、杉井先生の頃だったかと思うんですが、なんかガチャみたいなのをやったりとかもしてましたよね。

上田： 山本先生とか。

杉井： はい。ええ。そうです。山本先生の考えですかね。 あれはですね、あれ続けるといいなと思うんですよね。実はあれと同じようなことをやってるのがこのファンダメンタルズプログラムなんです。でもうちでやったのは単に、話をしてで終わってましたよね。このファンダメンタルズプログラムは話をしてマッチングをさせて、強制的に何か成果物を出しなさいっていうのは義務ではないんですけど、より深く自分の専門分野でどんな成果が出せるのかっていうのを考えましょう。もうちょっと突っ込んだところまで進んでるんですよ。やっぱそこまでやらないとどうしてもその最初マッチングというか最初話をするところまでで終わってしまう気がして、もうちょっと進められるといいなって思いますね。

レール： 今は、学部の方で新しいカリキュラムをどうするかっていう話が出てます。ワーキングを作るとおっしゃってました



けれども、私はラディカルに方向性を変えなきゃいけないと思うんですよ。学部が未だにバラバラすぎるんです。無理やり人こう合わせようとするのも良くないと思うんですよね。私が通った大学の日本学科は小さかったので転校したんですよ。ボン大学だったんで、そこは日本学科で人類学の先生がいたが、私はマスメディアに興味があって、そこにその学科がなくて、そして、現代日本に興味があったから、そのためにベルリン自由大学に3年生のときに編入しました。要するに、それぞれの大学にはそれぞれ、特に小さい学部、学科があって、教授は1人2人、3人しかいないんです。その教授の周りに専門の近い准教授とか助教とかがいて、1つの群れを作るわけなんですよね。そこでこの専門に興味がある学生がそこに行くんですよ。大学での専門書の集め方もそうなんです。何でもかんでも集めるのじゃなくて、総合大学とは言っても、それぞれの分野では一つのコアを一式します。私はいつも「コアを持つべきだ」と言っています。私の考え方としては、教育もそうだけでも、教育と研究はもう切り離せないから、学部でのコアをもっと絞る必要があると思います。国際総合科学部で一つのテーマを中

心にスタッフを集めて、これから続けていくと。その周りのものも切り捨てる。あるいは教職分離で、違うところから引っ張るんだけど、学部の背骨をもう一辺定義し直して、それに教育・研究を全部合わせるっていう。だから、私みたいなテーマもなくなる可能性もあるけれども、それはそれで良いと思います。そうすれば、じゃあ何かいいかが分からないんですけれども、例えばデザインであれば、デザイン全体じゃなくて、デザイン思考の何かの方向性を中心にやりましょう。そこで必要なものを全部その背骨の横に置いて一つにまとめるわけです。それは学際的であってもいいんですけれども、そのテーマを完成させるために必要な全てのものを、横見をしないで揃える必要かなと思うんです。結構ラディカルではあるんですし、すぐにはできないが、近いうちに我々は定年退職になるから、「同じような分野を是非補充してください」、「後任者を雇ってください」と言わずに、この学部のミッションに必要なスタッフを揃えましょう。

杉井： 実は今理工教員、先ほど出てきた理工教員グループは月に1回必ず打ち合わせるんですね。その中で、少なくとも理工系の科目とか研究でこの先、コアと言うべきではないかもしれないけど、主軸にしていこうかって話をしてるのがAIなんです。AIってもう文系も理系もないもので、もちろんAIっていうと理工系的なイメージを持つ人は多いと思うんですけど、もう今やその仕組みのことは、理工系に任せればよくて。今やAIっていうのはもう社会に浸透し始めていて、様々な分野知識や技術を使わないと捉えきれない存在になりつつあるっ

て考えて。これからちょっとAIっていうところでAI人材を育てるっていうことを中心にできないかなって話をしてるんですね。DXはもうなんかよくわかんない。DXじゃない。やっぱりAIなんじゃないか。例えばその話の中で出てきたのがキーワードとして出てたのが、そのポストAI時代の学びって何かみたいなのが、AI出てくればその記憶する必要もなくなれば、答えも考える必要もないくらいの答えも出てきてくれるんだけど。そんな時代になったときに、なぜ人は学ぶのかみたいな。何のために学ぶのかみたいな、そんなこと考え始めるとこれやっぱり学際的にもう分野なんて関係ないなみたいな話をしていて。ちょっとそこに注目しながら今後進んでいきましょかみたいな話をしてたんです。

レール： これいいですね。今ちょっと英語のフレーズが浮かんできた。ビヨンドAIなんです。例えば教育コンセプトとしては、まずはAIを知らないでビヨンドにはいけないですよ。まず基礎教育としてはAIを知ることです。そして一つのミッションとしてビヨンドは何が、何がAIを超えるかっていうことを探っていくっていう。そこもかなり学際的です。この間上海から来られた学生と先生も、AIを使って、ポスターを作ってたわけなんですよ。何が一番苦労したかという、プロンプトですよ。それはデザインプロパーの人とデザインプロパーでない人もいろいろ違いはあるけれども、プロンプトとかになるといろんな分野の知識が集まってくるんですよ。

杉井： AIってところおそらく情報学部が

できて、技術的なところはそこでやるはずなんですよね。でももしうちでAIって言ったならば、技術のことはもちろん知ってはいないといけないけど、それは研究対象の本筋ではなくて、それを社会にどう適用していくのかとか、どう社会にそれが浸透していくのかみたいなのを考えていくべきなんじゃないかな。それがまた我々の特徴になるかもしれないなって感じるんですよ。

レール： 教育だけではない。

杉井： はい。

有元： 今日、研究推進委員会の主催ということもあって、研究推進委員会としては何ができるかなというのをずっと考えているんですけども、それで今のところ、先生方ご存じのように紀要、研究紀要を作ったりとか、FGSS サロンみたいなその集まりを立てたりとかということをやっているんですけども。じゃあその中でそれぞれ何をやるかっていうことを今委員会の中でもいろいろ議論したり、私自身もいろんなアイデアを考えたりしているんですけども。先ほどの教員グループも何かうまく繋がりができないかなというのはずっと課題としてあります。ですからそれがうまく機能していけば、何か教員グループで、例えば、今回は言語コミュニケーショングループで、まとまった何か論文の特集を組んでくださいとか、研究紀要の中で特集を組んでくださいとか、それからまたキーワードを設定するので、これに対して皆さん投稿してくださいとかというようなことで、少し

ずつ集まりが何かこうできればいいのかなというふうなことを考えています。ですから、いきなり共同研究やりましょうというのはたぶんできないので、もうちょっと柔軟な繋がりをこの委員会ですぐうまくできればというふうに考えている次第です。



杉井： FGSS サロンは大賛成で、なかなか人が集まらないのをどうするかっていうのは対策は必要だと思うんですけど。FGSS サロンの中で各教員が自分の研究のプレゼンを、学生にもするし、教員にもするっていう機会になっていくとすごくいいなと思って。この前部局長会議で人文学部の、あれもなんか先越されたと思ったんだけど、ああいうふうにもう教員からは小難しい話でもいいと思うんですよ。本当に専門的な話でもいいと思うんですけど、それを聞きに来る学生は本気で聞きに来ると思うので、少ないかもしれないけど、そういう学生に対してその自分の研究の面白さみたいなのが伝えられると、とても価値があるんじゃないかなと思って。私学生に言われたことがあって、杉井先生、情報系の授業してるより生物の授業してるの方が楽しそうですよって言われるんですよ。自分では

同じようにやってるんですよ。同じようにやってるつもりなのに学生にそう言われるんですよ。そうらしいんですよ。どうやら。やっぱりそうなのかって思って。そこなんですよね。だからやっぱり自分のやってる研究の面白さを語ることで、その面白さとか意気込みとか、楽しいんだ、研究って楽しいんだっていうのが学生には伝わるのかなって思ったんですよ。

レール： 私もう全く同じことを思い出したんですよ。人文学部のプロジェクト。私はそれを聞いたら、めちゃ厳しかったんです。要するに、研究者の発表は「ド研究」。それもあると思うんですけども、今日私たちがやわらかく「こんな研究してるか」っていうのは、研究者が見えてない部分があるんですよ。学生にも今この学部の中では授業のときだけ研究が見えてるんですよ。多いですよ。PBLでは「レール先生ってこんな人だったんですよ」と言われるんですよ。「全然それが出てないね」とかって。だから、研究者の研究にストーリーがあるんですよ。研究者と研究は切り離すことはできないと思うんですよ。いきなり、こういう研究やってますってじゃなくて、やっぱり今日みたいに面白かったですよ。杉井先生に小学生のときMSXがあって、なるほど。またちょっと杉井先生の今まで知らなかった側面って聞いたんですよ。大事だと思います。

有元： そうですね。

上田： はい。本当に研究推進委員会が今してくださってることって非常に興味深いな

と思ってますし。紀要っていうのはそういう意味で、自由に挑戦できる、挑戦できる論文がかけるのかなと思ってですね。外に出してこうポイント稼ごうと思ったら型にはまるっていうか、これはないとまずいとか、そういうことが先に頭に来てしまうんですけど。紀要は自由にいろんなものをのせるチャンスっていうか、そういう意味でも紀要も、そしてさっきお話されたサロンの話も非常に良い試みをしてくださってるなと思ってます。

レール： どうですか。さっきも話があったように、有元先生から、ちょっとこう近づけるような感じで、テーマ的なこと早めにアナウンスして、共同研究ではないけれども、次の紀要のキーワードとか。

上田： テーマ的な感じで。

レール： そんなに絞らないで。例えば、人と移動のテーマとしては、自分も藤原先生のグループに入っていて、走るっていうこと、AからB行くとかもテーマに入る。なんかそういったぼやっとしたテーマでいいんですけども。できれば多くの人がアイデンティファイできると投稿してくれるかな。

有元： 何か特集号を組みたいんですよ。キーワードを出して、これに関する論文出す。論文じゃなくてもいいのかもしれませんが。そうすると、ある程度集まりがやっぱりできるので、そのあたりから徐々に進めていくしかないのかなと思ってるんですけども。

ルール： 座談会もちょっと含めてね。

杉井： そのテーマ設定がでも意外と難しい。実は今そのファンダメンタルズプログラムでアーティスト何人かと一緒にやってるときも同じような流れでやっていて、そのこのテーマ「環世界」って決めてるんですよ。「環世界」っていうのは、「環」ってわかっていうですね。環境の環です。で、「世界」ってその生物学哲学者のユクスキュルっていう人が提唱した概念なんですけど、生物って感覚器が違うので、見てる世界が違う。例えばダニは目がない。口はあるけど鼻も大してない。目が見えない世界で生きてるんですよ。だけど熱は感知できる。他の哺乳類に取り着いて血を吸うために。すると、人間が見ているこの環境と、ダニが感じているこの環境ってたぶん全然違うはずなんですよ。見えないから空間なんて分からない。熱が分かるからそれなりに分かるのかもしれないけど。でも、こういう立体物があるなんていうのはさっぱり分からなくて、生き物だけが分かるみたいな。そういうふうに生き物によって全然その世界が違う。その生き物ごとの世界のことを「環世界」って言ってるんですよ。今それをテーマにしている、それこそそのゾンビじゃないですけど、ゾンビの「環世界」ってどんななんだろうみたいなのを考え始めて、これ非常に面白くて。今それでやってるんですけど。なんかそういうちょっと緩い感じのテーマで、でも興味を引くっていうテーマ設定がすごく難しいなって感じながら今やってます。なんかそういうのがあると、そういうので出てきたその論文集みたいな読む方も

面白いんじゃないかなって思うんですよ。いろんな考え方ができるということで。

有元： はい。それじゃあちょっとそろそろ時間になりました。今日は本当にありがとうございました。実は裏の目的として、今最後の方でお話しいただいたように、研究推進委員会でのアイデアをいただくかと思ったのがちょっとありました。いろいろとご意見いただきました。ありがとうございました。それでは今回の座談会はこれで終了としたいと思います。短い間でもうちょっとお話を聞きたいところもあったんですが、第2回はたぶん、全然考えてないので、ひよっとしたらお願いするかもしれません。そのときにはよろしく願いいたします。どうも今日はありがとうございました。

ルール： ありがとうございました

上田： もちました。私1時間もつのかなって思ったんですけど。全然足りない。素晴らしい。1時間どうしようとか思っただけで用意したんですけど。良かった。

ルール： こういうのです。

上田： 勉強になりました。

ルール： なんかこうこっちは今学部でやってたんだけど、分野ごとにこういう若手とかがあってこういったサロンやってない。もしかして理系はそういう話してるんだけど、3、4人集めて何かのテーマでやってまた次の紀要にも1つの座談会としてあってもいいかもしれないです。

上田： はい。結構今日、本当に新たな話をいっぱい聞いたので、若い方から話したいこととか、聞いてないこととかはたくさんあるかもしれません。

ルール： 例えば、個人的に3人のデザイナーの世界観は知りたいんですよ。話があったりするとどんなもんかな。実験かもしれないけど、でもこういうこういうのがですね、できるんじゃないかなと思います。少人数でこんなに。なんか全員だったらもう喋らない。

有元： そうですね。FGSS サロンもさっき言われましたように、新人の先生に喋ってもらおうかなというようなアイデアも考えていたんですけども。やっぱり、新人の先生だけではなくて、先生方にちょこちょこっとなんか面白さを伝えてもらうような場になれば一番いいのかなと思いますね。

ルール： はい。だからさっき言ったように私は人が見たいです。そうですね。研究って、どうやってその人とその研究が繋がっているかだから、今日は3人でね、先生も含めて聞いて面白い。全然違って来るんですよ。

杉井： なんかあんまり専門に入りすぎるとやっぱ理解できなくなるし。入らない方がこういう場ではいいのかもしれない。理工系の教員では言われたようにやってるんですよ。それはもう本当にコアなところで。私でさえっていうか、私は足立先生の数学のやつなんかもう本当コアなところは理解できな

い。ですけど、でもやっぱどんな考え方でどんなことやってるのかっていうのは人柄も見えてくるし。なんでそういうのはあるといいですよ。

上田： 私も運動健康科学の授業で学生に1番受ける話は、ドリンクの話なんですよ。成分の話してるときにはみんなポカンとしてるんですけど、アクエリアスとかポカリスエットとかエネルギーとかいろいろスポーツドリンクの製品名が出てきたら目が輝くんですよ。なかなか成分の話をして、興味がある子は聞くけどそうじゃない子もいて。

ルール： そうなんですよ。僕も特定のスポーツドリンクが好きです。

上田： そんな感じですかね。

有元： はい。ありがとうございました。

(了)